

# 人がごちそう！！ 蘭越 住民作家に出逢う旅



広田まゆみ

## <はじめに～蘭越への旅>



札幌から小樽まで快速列車で約30分。

小樽からは、12:20 発長万部行きの普通列車で蘭越に向かった。意外に混雑していた車内だが、約2時間ほどの間に、余市、倶知安、ニセコとどんどん人が少なくなる。私は、こうしたゆっくりとした各駅停車の鉄路はこれからの地域観光のあり方を考える上でも重要であると感じている。自分自身が、この8月に車を手放して以降、よけいにその思いが強くなる。

さて、蘭越に向かったのには理由がある。

蘭越町で、昨年からスタートした住民作家の出版プロジェクトに触発されたからだ。私は、子どもの頃から本を読むの

が好きだった。専用のノートを作り、詩を書いたりしていたことを思い出す。漠然と大人になったら「本(?)を書く人」になりたいと思っていたほどだ。しかし、今は、仕事や勉強のため以外に、文章を書いたり、読んだりする機会は、全くといってよいほど、ない。この住民作家プロジェクトは子どもの頃の夢を思い出させてくれた。

また、私にとっては、このプロジェクトは、私が描く北海道の未来の姿につながる取り組みでもある。30代の頃、私は、農村に移住して、数年を過ごしたことがある。(下の写真が、私が昔、年間1万円で、お借りしていた空き農家—今はもう取り壊された)



今でも印象に残っているのが、地域のおとうさんたち、おかあさんたちに「若い人が田舎に来ないのは、ボーリング場やゲームセン

ターがないからだろう？」と、真顔で問われたことがある。あるいは、すぐそこに採れたてのトマトや西瓜があるのに、都会から来た人をもてなすために、わざわざコンビニに走っ

て、缶ジュースやお菓子を用意する姿も見た。悲しかった。

なぜ、自分たちの地域や暮らしの良さを感じていないのだろうか？採れたての野菜や果物の美味しさは何ものにも変えがたいご馳走であり、おもてなしであると感じられないのだろうか？

昨今のキーワードである人口減少であるが、私は、むしろ、この問題そのものへの光のあて方が「問題」だと感じている。地域の幸せや発展のために、問題への「光のあて方」を変えることこそ、北海道の自立のカギがあり、地域の持続可能な発展のヒントがあると思うのだ。その点、この住民作家プロジェクトは、仕掛け人自身も、自然体で楽しみながら、自分の人生や地域と向き合い、イキイキと新しい価値を外に向かって発信しているように見える。そこに私も是非参加してみたくなったのだ。

もちろん、「出る杭は打たれる」という諺のとおり、現場のみなさんには、さまざまな苦勞もあると思う。しかし、こうした若い世代の新しい発想での未来への貢献、地域への貢献を少しでも支えることができたなら、光をあてていくことができたなら、私にとっても幸いだ。

また、私自身も移住体験者で、当時のさまざまな挑戦と比べれば、今の仕事の仕方は不十分かもしれないと、反省もするところだ。もう一度、何のために、何をするのか、そんなことも考えながら蘭越に到着した。

## <人がごちそう～住民作家に出逢う旅>

### 1 琵琶博之さん（蘭越町議会議員）



いよいよ、蘭越に到着した。

昆布駅に到着してサプライズが待っていた。なんと、蘭越町議会議員の琵琶博之さんが「歓迎作家広田まゆみ先生」という旗を持って待っていてくれた。気まなぶらり旅日記風に、気軽に日記をまとめようかと漠然と思いながらおじゃました私だったが、思わぬ歓迎に、恥ずかしい反面、なんだか嬉しい。

琵琶博之さんは、大阪出身で、4年ほど前に蘭越町に移住。当時のロングヘアーをばっさりカットしてくれたのが、カッ



トルームレスト須藤信一さんだ。(須藤さん自身も住民作家)。琵琶さんは、須藤さんとの何気ない会話がきっかけで、町議選に出馬することとなる。ご自身が、移住者として経験してきた課題を解決することからスタートをし、以降、飄々と、インターネットなどを駆使しながら、多くの仲間とと

もに、次々に新しい企画を、提案、実践されている。

この住民作家プロジェクトの前に、私がささやかにお手伝いしたプロジェクトがある。全道の市町村議会の議事録が未だネット上で公開されていない議会もあるために、その推進のための陳情書を全道全ての市町村自治体の議会にあげるということを琵琶さんからご提案を受け、私が、陳情の代表者として名前だけであるがお手伝いをしたのだ。

<北海道市町村議会への陳情結果>

<http://nisekoweb.jp/kaigiroku/>

一度は、本来は、議員の職を持つ私ではなく、住民のみなさんの権利として、地域住民のみなさんが代表となるべきとお断りしたが、地域のなかでは、「議員」は地域の名士であり、その議会に対して名前を出して陳情をあげるのは、趣旨

に賛同しても難しいとの実態をうかがい、私の名前で良ければと、代表者として参加させていただいた。

その結果、残念ながら、決して、直接は言われたいのだが、この活動に関して、私に対しても、さまざまな揶揄があった。直接言われれば丁寧に対応したいのだが、道議会議員と市町村議会議員は担当する自治体の規模とその役割が違うだけで、水平対等な関係にあると私は考えているが、地域におけるどこか歪んだ関係性も改めて感じたところである。

陳情は、住民の権利である。民主主義の土台であり、地方自治の推進役でもある議会が、その機能を果たし切れていない1つの事例である。

もちろん、多くの自治体議会議員のみなさんは、懸命の努力で日夜活動をされていると思うが、努力のやり方にも、「違う光のあて方」が重要なのだ。

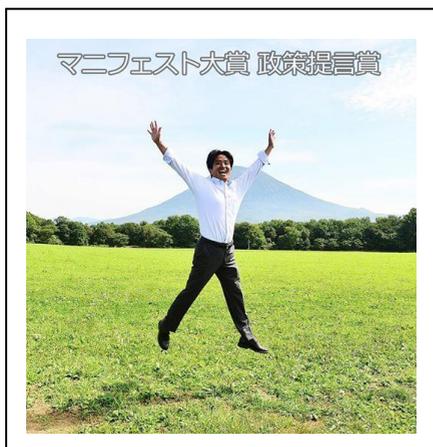
この陳情活動の成果は、今のところ、それほど大きなモノにはなっていないが、琵琶さんの活動を間近に見て、声高に主張するような活動ではなく、どうしたらお金をかけずに議事録の公開ができるのかのマニュアルも、必要であればアドバイスもしますという一文も添えて陳情書を作成した企画者でもあり、実務者でもある琵琶さんの仕事ぶりが、非常に勉強になったし、感心もしたところだ。

当初は、今回の蘭越行きは、誰にもお知らせせず、ひっそりおじゃましようと思っていた。しかし、執筆を宣言しながらなかなか原稿が来ない私を心配してくれたのか、たまたま、すごいタイミングで、「執筆の方はどうですか？」と琵琶さ

んからメッセージがあり、つい、「実は、明日行きます」とお知らせしてしまったのだ。不思議なご縁だ。世の中に Facebook という発明がなかったら、出会わなかったかもしれないご縁かもしれない。

そんなわけで、今回の旅は、期せずして、琵琶さんにご案内いただきながら、住民作家プロジェクトの関係者や、すでに作家デビューしているみなさんに出逢う旅となった。まさに、「人がごちそう」であり、おもてなしである。不思議と、「作家」というキーワード一つで、初対面でも話がはずむ。話題も見つけやすい。観光に来たお客様のリピートを増やすには、景観よりも、人との接触を増やすことも重要な一つとされると聞くが、さすが、琵琶さんである。

琵琶さんは、全国の超党派の議員が善政競争をするローカルマニフェスト大賞でも、政策提言部門で優秀賞を獲得されている。



今後がますます楽しみでもあると同時に、私も、琵琶さんの活動に、学びながら、議員活動にも地域活動にもより努力しなければと思わせてくださる存在だ。

## 2 今川 藍さん（幽泉閣）



まず、昆布駅に着いてすぐ、ネットで宿泊予約した幽泉閣へ。一人旅でも、夕食なしでも、宿泊 OK の有難い温泉宿だ。wifi 環境も完備。ネットで予約しようと思ってもほとんど満室。人気の宿だ。

そこで、いわゆる公的温泉とは思えない m( )m ホスピタリティで迎えてくれたのが、住民作家でもあり、温泉ソムリエでもあるフロントスタッフの今川藍さん。

お仕事中で、お話はじっくり聞けなかったのだが、「幽泉閣へ行こう！～使える温泉入浴法」の巻末に、今川さんの蘭越町への思いが書かれている。導入の自作のマンガ、わかりやすい温泉の知識もさることながら必読だ。



幽泉閣は、温泉の泉質も良く、個人的には「あつ湯」と言って、45℃のお湯があるのが気に入った。勝手な鍛錬法だが、水風呂とあわせて、交互に入り、最近のテーマである副交感神経と交感神経の切り替えスイッチと自分の中庸の軸を強化する訓練にも効果的だと

思った。是非、長逗留をしてみたい温泉である。

朝食も、蘭越のお野菜を中心としたお総菜が並び、「らんこし米」を美味しく食べてもらえるようにというコンセプトがしっかりしたバイキングなので、シンプル＆ヘルシーで疲れない。実は、歳を重ねるとともに、バイキングは、苦手である。自分のせいだが、ついつい、食べ過ぎてしまうのも気になる。しかし、幽泉閣の朝食バイキングはおすすめだ。

ただ、夕食であるが、蘭越町自体には、一人旅の観光客がふらりと寄れるようなお食事処はないとのお話であった。今回は、是非、チャレンジしてみたい。普通の居酒屋でいいのだ。弟子屈町の川湯温泉界限は、地元発の旅行会社があり、リストバンドなどが宿で販売され、旅館で囲い込むことなく、まち歩きも推奨されている。リストバンドがあれば、ちよっ

としたサービスも受けられるし、会話のきっかけにもなるので、はじめてのお店でも一人で入りやすい。外からの観光客の滞在時間は、お買い物、食事などの経済波及効果を、地域にしっかり循環させようという戦略的な試みでもある。まちの歴史、なりたちが違うので同じことが良いとは思わないが、ちょっと「惜しいっ！！」と思った点だ。

弟子屈温泉は、札幌からはさすがに遠く感じるので、私も、年に1回程度しか行けない。しかし、人とのふれあいができればできるほど、通いたくなるのが人情というものだと思ふ。だとすると、蘭越町は地元の方からすると「不便でしょ」とおっしゃっていたが、



鉄路があり、しかも、幽泉閣は、跨線橋を渡って、昆布駅直結だ。蘭越駅界限とは分離はしているが、そこそこ、鉄路で移動可能でもある。町内の循環バス？もあるようだが、ホームページの説明はわかりづらく、町外からの観光客にはわかりづらいし、おそらく、外の人の利用を想定していないと感じる。先日、おじゃました音威子府村では、もちろん、時間の制約はあるが、町内の循環バス等を利用して、天塩川温泉や、箴島エコミュージアムセンターなどをある程度、「まちぶらり」「地元の人とのふれあい」を堪能できた。

この点も、「蘭越、惜しいっ！！Ⅱ」である。

### 3 高橋 伸次さん（住民作家プロジェクト代表）



昆布駅直結の幽泉閣に荷物を置き、次に向かったのが、「蘭越町高齢者福祉センターこんぶ」だ。おじゃました時、ちょうどデイサービスのみなさんが輪投げのようなゲームを楽しんでおり、その真ん中にいたのが、蘭越町の住民作家プロジェクトの代表である高橋伸次さんだ。いわゆるお年寄りのお世話をするというよりも、自分自身もともに楽しんでいる感じが伝わってくる。

高橋さんは、自身も住民作家であるが、デイサービスの利用者である日比野フク子さんが嗜んでいた短歌や、リハビリ

のためにはじめた「大人のぬり絵」が素晴らしいのに目をつけて、住民作家としてデビューをしてもらった。いわば、才能を発掘され、テレビにとりあげられたりすることで、元気、明るさをますます増している様子の日比野さんの作品を、まるで自分の家族を自慢するように説明する高橋さんは素敵だった。また、高橋さんのみならず、センターのスタッフや他



の利用者さんも応援している様子に心があたたまる思いもした。(下の写真の中央で笑っている女性が日比野さん)

高橋さんは、



福祉の現場で働き続けてきた熱血公務員であるが、しかし、少し変わった経歴でもある。社会人のスタートは、町外の民間会社で、3年間、営業職として仕事をした。転勤などの話もあり、地元に住み続けたいという理由で、ちょうど町で募集のあった福祉の仕事に飛び込んだ形だ。それから、一貫して福祉の現場で働いている。

そのせいだろうか。おそらく珍しいと思うのだが、高橋さんは公務員の枠を越えて、商工会青年部にも特別会員として参加し、さまざまなイベントに忙しく活動している。その活動のなかで、たまたま、琵琶さんと出会う。町議会議員となったばかりの琵琶さんに、初対面で、いったい何がやりたいのかと詰め寄ったとか。高橋さんが驚いたのは、その翌日、さまざまな企画を持って、琵琶さんが訪ねて来たことだそう。会うべくして会った2人とも言える。琵琶さんにとっては、地元育ちで役場職員である高橋さんが、「出る杭」となることを厭わず、ともに活動をしてくれることは有難いことであろうし、高橋さんにとって、琵琶さんはよい刺激、よい風になっているのだと思う。言い古されてはいるが、土に根ざした人がいてこそ、風を運んでくる人の力を大きく活用できるのだ。

今後は、役場や議会を含めた従来のまちづくりを担ってきた組織が、新しい若い世代の挑戦をどのように受け止めて行くのかが試されている。私自身も応援団として、しっかり注目していきたいと思う。

#### 4 榎谷文芳さん (蘭越町コミュニティプラザ花一会館長)



次にうかがったのが、50人の住民作家プロジェクトの作品が展示してある花一会だ。本日は、休館日だったのだが、琵琶さんが事前に連絡をしていただいていたので、会議中であつたが、館長の榎谷文芳さんに、お話を聞くことができた。榎谷館長は、住民作家プロジェクトのよき理解者でもある。

北海道における町村の図書館設置率は非常に低く、全国平均の53.9%を下回る43.8%である。とりわけ、後志管内と宗谷管内における設置率が低い。悪い意味で、町村の横並び意識が影響しているのかどうか、原因を今後調査してみたいところだ。蘭越におじゃまする前日に、私自身が主催する白石情報交流サロンで「北海道の美術に関する勉強会」を開催し



一方で、日本の社会サービスは、今や、いわゆる「非正規」の労働者によって支えられているのが現実であることを、今回の蘭越への旅でも如実に実感する。

樋谷館長さんが、3人の高校生の作家デビューに続き、今後は小学生も作家デビューしてくれたらと嬉しそうに話してくださった優しい笑顔が印象的だった。子どもの頃から、情報の受け手から発信する側、作り手になることで、地域や社会への関わり方は、変化するだろう。公的な図書館の設置を展望しつつ、公的かいなかに関わらず、専門家が配置をされた図書館の存在は、重要である。

公設か否かにかかわらず、地道な樋谷館長以下、職員のみなさんの地道な努力に敬意を表しつつ、この住民作家プロジェクトをきっかけに、後志管内地域で、図書館のあり方に関する議論が活性化することも期待したい。



## 5 おかしのほりかわ さん



元篠路高校教諭・まち文化研究所主宰の塚田敏信先生の教えにより(?)、地方に出かけたら、必ず、地元のお菓子屋さんに立ち寄ることになっている。確認は

していないが、179の市町村自治体すべてに、お菓子屋さんがあるのではないかと思う。蘭越にはお菓子屋さんは3軒。本日は、ほりかわさん1軒しか行けなかったが、「雪饅」というお菓子をお店のカフェコーナーでさっそくいただき



ながら、4代目の「ほりかわさん」からお話を聞いた。ほりかわさんは、住民作家の一人でもある。昔、町外で暮らしていた頃の日記をまとめて発表したそうだ。本人のご依頼により、残念だが、雪饅の写真だけ撮影。

以前、四国や九州に視察に行った時に感じたことだが、おもてなしとして、地元のお菓子屋さんのお菓子や、地元のお

茶をいただいたことがある。そこでしか食べられないものをお出しするのが、私は最高のおもてなしだと思っている。北海道の道の駅や、お土産物屋さんに行くと、そのまちでしか買えないものではなく、札幌や旭川でつくったものなどが並んでいて、がっかりすることがある。

是非、これからそのまちでしか食べられないお菓子を美味しく作り続けてほしい。

## 6 清水 達仁さん（湯ごもりの宿アダージョ）



20代の蘭越在住の清水さんは、「シャケ武士」(蘭越町非公認キャラクター)など、ゆるキャラのネットワークで、自分の生まれ育ったまちで、いろんなイベントを発信したいと奮

闘中だ。「シャケ武士」とは、蘭越町の新たな名産品として「サクラマス節」を売り出したいと作られたキャラクターだそう。

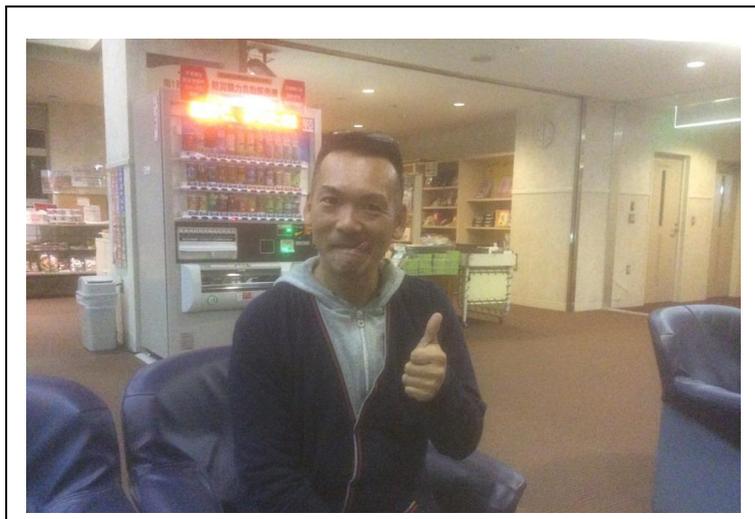
ネット上で、彼の志に賛同した人たちが、いろんな作品をコラボしてくれているそう。自分自身のテレビ番組も持っている。今回は、シャケ武士の新たなイラスト集で、住民作家プロジェクトに参加する。私のレベルでは、なかなかついていけないのだが、独立した情報発信の媒体を持っているのは強い。

個人的には、「ゆるキャラブーム」は、実は、あまり好きではない。誰がどのように、つくったのか、キャラクター商品はどこでつくられているのか、それを検証していくと、地域にお金がまわるしくみにつながっていない場合が多いからだ。



ただ、この「シャケ武士」のように、ほんとうに地元から発信される、手造りのものや、地域に志や誇りを循環するものについては、どんどん応援していきたい。

## 7 小野 剛良さん（ニセコ生活の家）



最後に、お会いしたのが、隣町のニセコから、このプロジェクトに参加している小野剛良さんだ。千歳出身で、千歳在住時代は、家と職場の往復で、彼の言葉を借りれば「ひきこもり」だったそうだ。ところが、ニセコに移り住んだことをきっかけに、なかなか難しい福祉の現場で重責を担いながら、地域のイベントにどんどん参画し、忙しく過ごしているとのことだ。もしかすると、自分の体験も踏まえてなのかもしれない。「臆病で人見知りでも地域で有名人になれる5つのコツ」という本を出版されている。

住民作家プロジェクトの代表の高橋さんも福祉の職場であるが、福祉職場の人たちが、福祉の領域にとどまらず、地域

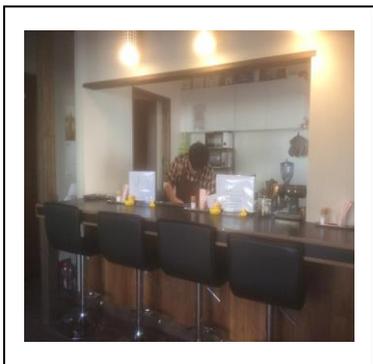
に新しい価値を発信してくれることは、間違いなく地域の力になるはずだ。私自身が、社会人としてのスタートを切ったときに、その創設を間近で目の当たりにした「浦河べてるの家」がその典型だと思う。

小野さんとは、なぜか、浦河での再会をご提案してお別れした。これもまた、何かのご縁である。

### <さいごに>

今回は、他にもお目にかかった蘭越の素敵な方はいるのだが、住民作家プロジェクトに参画をしている方にしぼって紹介させていただいた。

ご案内いただいた琵琶さんはじめ、ご紹介させていただいた蘭越のみなさん、ありがとうございます。そして、きっと作家デビューの仲間入りをするだろうと思われる、これからのらんこしの「まち歩き」の拠点となりそうな「街の茶屋」の朝比奈隆之さん、「あひるずかふえ」の村尾佳高さん、ありがとうございます。作家デビューをお待ちしています。



人がごちそう！！蘭越 住民作家に出逢う旅

発行 2014年11月1日 初版

著者 広田まゆみ

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト